蟬塚集　上

へ 5
6609
1

武さし中瀬の家に宝祖乃ゟ吟社
禅子能く里に塚を築きてやまと之
百五十回の忌辰来るとて翁はせを
耕すなるとて其、作善の於母年ふるを
四方の門人おの〳〵吉旦を急ぎとともに
ひとつに一集と成し其挑の典ふ
諷し言の雲となりさんやさ満し
おのつから生平久たんの禅画耳

へ5
6609
1

PB28
斎藤

87855

<2000-391>

書のなをば蟬冢集とぞよばれん
賤が手業にしあらぬの今せむかた
なくなんとて風雅の営芽を
むかしえらみぬ

天保十二歳星次辛丑一陽日

蟬塚集上

四月十二日於吉祥精舎興行
祖翁百五十回忌追福誹諧之連歌

物事の花ぬけし殻と見ん蟬の声　翁
出る月まてしかけ松の夜　菊上
氷の人足撫をなく人茶も　風朗
風きり鐘のかなしきもせぬ　寄三

工合よく落縁下地の乳くる月　遠闘

新酒の醉乃まはりとかハり　子渡

八方へ足の数宝は市をとる　可考

蜂子の乳けりよ見ぬ家ちかし　足水

さうや軽き鏡は当は筆との光　空外

欲は見えぬ錢敷ゐ　反落子

賊とも信とも見ゆ類かしらべぬ　筋立

寒ふるやうし　和石文士里　佛煙

弦掛のいましき月はゆけ　分尾

猪ふ秋のあはれし雉子は羽を守　酒濤

うるほしと飾ゆもうぬ垂は来　毛居

出窓ぶ底のぬける華足袋　不牙

商ひよ施は実生を仕立置　沙来

自由すまの曳る山際　貝睡

遠目あかい江湖は庭の姿もしろ　西馬

根茶の香へ行風はもう流く　園荻

一順

姑乃婦こゝみなこされゆくあらし哉　翁

月の紀念を折りのこし筆　南二

露志られひと雑つゝ青き尤て　耕雪

眠をさましてた猫乃鈴ふる　逸淵

蘇への聲しおさの立ち誓り　家三

きみ毛なしかけゝる山さとの宿　雪

雲わけし脚ふむ跡ゆく筆の跡　南

旁かるもゆるむ丸くけ乃帯　三

搖文乃おさ孫とらん浮名屋て　淵

良くもけてき以り花合せ哉　南

家さいよ家ざらりさぬ字をあり　雪

聖凡かこの世すむらしし鉄樫　淵

洗ふまゝきあらひ経すの根引月　三

牧生會きれ小雀ちと錢　雪
兄弟ひとれはきゝりと庵蔵の鎰　蘭
僧人らあらしんともぬ人物　三
花の留主もりしかるをの吉　瀾
枯葉交りの嫁菜とつ居れ　蘭
きゝ扉かけ雨もまだぬ彼岸過　雪
小型き船の志ろつ幾く意　瀾
猿杉く汐見てどれの浩きあけ　三

志んとなしの免くこく雀櫨子　雪
いつしれし箱茶仕習ひ病より　蘭
柔術外奥儀をもゆるしけり　三
且方も嵐にむらむし寒のこゝ急　瀾
蔡道の衛をきて数人足　蘭
大名あとをもとらぬ細き路　雪
吹乃井て竈馬生まれ　瀾
満仲さまれ桜に勝るの月さして　三

盃に来ませと結ふむとくり月　雪

飛御荷社鏑にかゝる小隙さらし　南

温泉にもしきの悪さ左傳子　之

秋く夜に狗のはし清かねの声　淵

帰るさや秋扇つれ来事　南

浦の真澄の色おもしろき　雪

雛の姿みすを打のこし松　擱

聖祖の百五十回遠忌を
ものゝふ発句望まれけるに

志くれ忌やむかしのしるしの月は笠　鳳朗

佛前手向

身にしむやまたきかぬ蝉時雨　逸淵

湖をこゝろむとき清水かな　西馬

揉まれても風のかほりや塚の花　義了

待やまさりし名の若社也　五渡

蝶ねても恋しく夜半のむしろかな　國成

枝に帰る蛙もときぬ手向かな　旦勝

蕪の実に露も真玉に研ゝかな　耕雲女

白菊にまた時雨のあとを信きけり　寄三

朝夕や塚の掃除も夜のつとめ　南山

春之部

歳旦

元日や日の出の眉に写る花の都　風調

あら雲の出ぬく世の中しあけ行春　（下ツケ）人之

大日經曰

八葉蓮満照寶藏門

蓮も今世にひらきけり明の春　（ムサシ）梧来

親舟に鳥のまわり影ゆえけり　（シナノ）来白

きやしと曲る寺に物への雪　（エト）二柳

汲まるゝ水に廣この物ゝ新　（十二八）其山

まり川との行ゝ幾ち山吹との見けり　（エト）耕雪女

幾つゝ龍のいつまでも夜の秋ゝ　坎窠

菊水や盾に掛るや井戸の蓋　梅室

わのるてさらしも乾ゝ硯の秋　（エチコ）甚琴

東都に住し年を思ひて

藍園も先玉川の秋の味　逸淵

仕舞ふてもやる名なかりきる蟹　（ムサシ）正阿

引のけてまかりてまむや花紅姫　禾木

蓮葉に露らしむかの小萩哉　蒼虬

出来よふて見なれき蓮葉の夜かな　（上ツケ）来史

かり網やとりも出来ゝ藻屑の秋　（アハ）鷹叟

稲葉に見えもしかのかる一穂の秋　（エト）松什

明るて夜暦蘿の香のよこ百む　（京）古老

草葉の露に志ての秋やかりけり　（スルカ）與路

用もなき初の行商哉恵方への都　江戸 荷了

太箕哉おまつりよはふ二日の雑ゝ　加雪

寿帝のつのむそめ清く二はこの礼　ヲハリ 蓮陽

福引なしてもらひけり京みやけ　上ツケ 西馬

ふる羽子や障子へ行く新法帖　ムサシ 少雨女

二三かしくて開けは安政暦の郷　カヽ 年緒

新玉の水汲し行く玉は月数の礼　上ツケ 夢蛍

筆とりし出る席多し三ケ日　京 柳絲

乾坤

霄嶺哉出来て萬清く朧月の礼　サツマ 山骨

人乃見てよ梅の雲の星の様　ムサシ 汲峯

引汐のあとへ移ふしたんと加寿　江戸 向蛍

藪入を搦のしての暇ず翁哉　イナハ 御光

藪入のいとまぬ女宴の様りの礼　ムサシ 五渡

庭に清く出てうしらうんまさに飾宮か　エチコ 大煌

嵐物哉なまぬ園炉表は来の雪　淡叟

消るからぬ春とも草の雪　（東武）可大

寒からぬ筆のあかれける雪解かな　僊物

名所古其まゝ梢のうゆきかな　（エト）蘭枝

舞蝶子蓑虫や閉て鶴の声　貞宜

壁ときし畝煙に咲や中の霞、　其窓
墻尾咲りん

湖や生年燃る春のこゝろ　龍風

砂原や歩行あらけ春の風　荻子

春の勢ひ外に風なく田沢ら松　（上ツケ）梅守

ありけれ縦の光りや春の風　（エト）雨兆

湖の音にきえしも春の風　（ムサシ）素扇

春風や蹈もた草を吹あらし　（エト）其女

露夜かの月身まかりけるより　其徒
より志てもなかりしにや春

春雨にぬれし戀文　鳳朗

春雨や振袖のけし墨巨蛙　遊淵

物ごゝろ付るあかりけはする秋の雨　ヲハリ　沙鴎

糸遊秋ともみえぬ破れ垣　鈴枝女

隅実ふるも更の底ぬける手洗の香　ムサシ　文淵

蛤秋は日本もわかる高嵐の郷　カヽ　柏宴

出牢まで眼を閉て行く汀かな　ヒウカ　駝岳

下ろし秋下の窓をあけて暮秋哉　[illegible]　舎用

をしむ秋も輝て浮て去る秋の月　、　祖也

暮秋哉や梅もとに眼の覚る　チクセン　宇遠

合点したる秋はちらしぬ二日灸　イヨ　菊圃女

山寺や白雲おちこのしなの寺あくら　サヌキ　茂椎

宵やみはしまりに鏡聖山の郷　禾木

山焼の屋の舞ふむ庵かな　サカミ　宣頂

汀のゝ萩秋明けり暮秋潮　エト　荏都

まさしくと打むるけぬ細の郷　一具

角ぐむ秋をしゆる鮒の釣捕かな　ヒタチ　聖菓

大勢で走いてくる破れ印　上サ　嵝牛

初に川家は宮も三ツいら跡あり　風外

常山も所々暮の春ありけり　（エト）蕎守

出代の顔ぬれて魚うる川のほとり　（ヒカミ）槐堂

出代や仲織錦茂を長常　（エト）蓁静

野良も荷て出かまも親男への礼　耕雪女

壽ありし皆玉川より名家のしるしを

院くへ自ら年苗長春秋　（ミカハ）流芝

柳のくるも親春ありをあの水　其山

折らんるも鉢花紅梅追や暮鉢花　（エト）若冰

霞のれハうしろ背ぬま秋の山　雁嶺

提燈の越す来たりける野や里　（エチコ）菜山

千歳円もあふれて春秋と弥生山　（エト）台う

鍾馗人飾てもりる所あるやよむられ、　呼二

隠りも舟を碑う秋上巳かな　（上ツケ）晃水

飼蚕まる人もさしのさかり蘇　（ムサシ）篤存

夜ちかく蛙や廊下ゆく人の行、　鬼雄

植物

一本もなくて小松は河ぞひの森　エト 秀直

松引て後のしづかさ乃ちの加な　フンコ 維方

小松引人さくより眉は枝もなけり　チクコ 文老

旅人を蓄ついでに都しけりな　テハ 涼風

行燈と加すまち写のはれ川あくの森　サヌキ 今芝

摘草のうち分ばしたる若菜ゝの森　ムサシ 園荻

新らしやいつの世よりぞ佛の座　アフミ 窓白

ゆく春りまけゝさ笑んぞうめの中　ナニハ 不鵞

大津画に何のたまものや梅の花　應之

芽やらん生た川のむかしや梅は花　エト 梅笠

さけて某ゝ手も終りけり梅のはな　ヲク 晋丈

梅咲て子年孫宮子都のかゝり　耕雪女

まきまりぬつのあたま入やまなかれ　風調

二年来を折て又きし柳哉　エト 雅草

よる柳さんし二階ありの川むかひ　ヤマシロ 丈叟

池ありと人ゆる柳や燕かな　ムサシ 其圃

年寄は暮てはやゆきの山茶　菊了

日あたりは花のちらぬ桜かな　エト 左尓

蒼海の光りは朝の桜かな、　月芳

菜洲や水古きの世たる春かな　イヨ 山蔭

漁りまて掻て来なり浮くし　カヒ 欽哉

席桜の盛りそらしさくさつま　エト 月古

紳きつて人ちるひの散れ葉かな　上ツケ 可考

吉野桜の花人と桜の川芽生のかな　エト 壊翁

淀みにまかせかれる春や筆の苗　アキ 雲頂

人の行く手は筆上の桜楼かな　上ツケ 鶴周

此花の浮きとりかな菜子ゆの花　ミカハ 水竹

知られたり人の手まへる春の川　梅室

見ても人あらぬ桜の初ざくら　エト 氷壷

西行讃

世を捨てこそ世にまたれ笠の上　卓池

片足を浸きし花の麻かな　沙鷗

人形の汁はのりて夢むとあ　十二八 林貴

まれ寒し人の恵遠く鳴けり　ムサシ 喜我

都まねくうかしきむの留守居かれ　七夕子 米外

古妻むら鰍の生みよし小濱於那　紫年

ゆふくるゝ会好りけるむの陰　寄之

嵐山

人形みる江よふ乗もうへ名ときく　梅室

むかしあるまゝなき柳桜かな　七夕子 雪女

海棠や照ついてまた那雫　深花

かきの和しきる果物をかりて
見物ひとし様をとしたる柳あり

柳ちとも花弄すまゐもりけり　逸湖

知とらぬも鈍は清くの姫や蕪乃む　由誉

男き桜よもまよひありみちの秋　ムサシ 涼松

立よれ浪よもれてなき幸来か　工卜 魯心

旅は杖姥きカイコミより廣野に
かりそめは雨の名浮ミに許むまでつ越
ほり出し旅労をやくちまちに物なり
一枝もちから重り泳ぐ馬味の乱　南之

生類

鶏けしれ笑草のよ出で乍し　碩布
うらがれのお見て小藪への礼　ヒセン 眉山
蛍やゆく川と拙まし出で歩行　十二八 新左

宿庵見は麦秋立て穂ぬるのれなり　チクゴ 馬胡
去年やいたり行きの人ゝ高あるのり　ヲバリ 可后
涼しくらや渡しまへりし笠ひもりの人　イセ 一画
萩花ゝまつら小乞ゝ鹿の秋、　豊山
はま出て泓田をこゆや雉子の声　蒼虬
川中社一枝綱やまらの宮　ナカサキ 甫旧
一本もの人かき鋤りや物屋　京池
見て立ちちから残むまね恵み屋　エト 丁知

萩子ちらんでよむ越屏風うれ　上ロケ　知言

氷魚や袖をかざして杵つく見む　蕪子

高刀突や合点のゆかぬ男の心なす　ムサシ　古魯

葉鮎の瀬音をたてゝは跡をかくる　サカミ　立字

衣食

上臈をほくる宇治のは森この郷　上ロケ　雙暁

垂簾のうちなる海苔やくもりえん　寄三

草餅をまなへつしよ郷る古戸の春　エト　楽之

神釈

獼猴のゑとりは杉手も居この郷　丁出

ま川午や寒さも起しおり花　東ゝ

西のり社鍛冶へ婦もし神ん徹　西馬

涅槃会や草木年寄る西の露　蕪了

公事放る

芦原の部屋加へ扶桐覚えこの郷　寄三

杖持は脇をあかして縣召　園茂

笠つけて来る蚊をふむや庵の前　西馬

涼しさや一日あるいて草の上　逸淵

夏之部

乾坤

杜ある社中へ参りて四月の頃（三十八）　月我

木かけの夏のてる涼き新月かな　寄三

足もとも新たまめの子牡丹明あし　一具

二枚揃て緑のみしかの秋草花　（ムサシ）玉芝

粟津義仲寺にて祖翁の百五十回忌
奉扇会に越して梅室のもとより
發句望まれしを

十とせの昔をとて世にある昔語り

奉扇古郷に来てたむけして　鳳朗

加く扇面志して相ぐる如

鳴らはさは思ひならぬ扇かな　窓水

あの寺は人かちらしき様也り　雅佛

出とさみたれ頃もちかき垣根哉　（シナノ）圭布

窗乎の鏡の垣根少けり　（アフミ）楓下

塑鉢子の出生や垣屋の内と外　（エト）壺天

川風や姉らしきもして垣居に来る、　氷狐

掛蟬をかりてあつかる日傘かな、　蒙居

掛子のうち出生募てしるや日傘　（ミヨシ）素行

子供連て庭人に来て麦の秋　（ミカハ）蓬宇

二三寸あけてある戸や麦畑　（デハ）云子

鹿神の神楽啼ゆ鉄猫かな　蒼竹

葉隠りに出て孫ね垣根の手　（シモツケ）来足

夕月雨一あれ暮てきれにけり　（ヒコ）仙翅

人声を椅子起しや五月晴　（ハリマ）芳夢

さみだれの夜はやんで軒はそのかな　（ムサシ）守墨

六月や鉄観青子　夕茱師　逸瀾

壺屋や夕立過の郭公　（エンシウ）旦松

ゆふくれや降やむ時雨の音　（ムサシ）今柳

雪はれぬ立や伊吹のうら表　（サツマ）波文

生ひ茂し出ぬはる人の雲はる岸　（上ツケ）佛煙

崩れても松はひとつありくれは峯　（エト）松花

すゝしさや月の影さす松は色　（ヲク）鬼孫

近よりて見へし驚かれ、　心河

草堂叔望

家よりも淋しき寺の新法師　両馬

秋よ見てこゝら人出まや夜半敷　（上ツケ）百牙

初恋

抱籠のまゝくされ契りかな　逸瀾

別恋

汗ぬくひ樽子のまへやの礼かな　（アハ）栗葉

宵くや落はましたなむしろ　（エト）英文丸

月さして秋も無きも清乃哉、　謝堂

雲雀らく清とありあはし清水かな　（ムサシ）素鶴

手傳ひの菊や社のをそき出用乎、　里之

植物

一ト本牡丹に清ふ古家哉かな　鳳朗

手を引きて君らしや菖乃杜若　蒼虬

挿てうらしもの婦ゑけり加賀つまた　（エト）抱儀

接木まで

汁しおかけれいや鶯り聞　鎧武者　（京）梅通

やまく汁蒸花にむかし汁に聞　（エト）萬古

芥子は散る事いふらず咲けり　耕雪女

溝ましやなくてもちまきる川蔬子　五渡

稚き人形の度を根して

うれしく紅茶の枝まがる桜の実　梅室

菊のてやうに見ゆる紅葉楓　（上ツケ）沙来

お蓮ヶ原

蓮点半月を打鉢のいふかな　（京）池

咲となる葉は露ありにけり　下フサ そよ女

池水の際しらみけり四方の雲　梅室

うつくしく夜露おりし蓮の浮葉哉　タンバ 月樵

昇らしく音すらしや昼は蓮の花　エト 渓斎

二階から見る人多し蓮かな　ムサシ 旦睡

夜蔓もてあまされし古蘭の花　碩布

生魂

活きさる十王経の出るひよみ　四山

竈を出し中や八の月は頃の果　蒼虬

梢の人さも作くきむ声を知る哉　卓池

大空はちこの花火かりよきな　エト 雀箱

仰も那き出なんて居る八方との哉　寥三

麦藁を嫁とりし秋の静かなれ　淡叟

庭先や帰ねる稲も来たる鶉　ヲハリ 鳥津

一粒の雨もたまらし浮草の花　エト 朶丈

浮草とあつかへし居る野雪かな　ムサシ 麻吉

貝よする星に昼見ん新月のはて　荒外

蛍みる似ぬむしまでも光りけり　アハ 鳳儀

地に落てつまむものなき蛍かな　ヒセン 然ゝ

老近くして夜遊ほうすかな　オク 佛孫

憐義士

坂あれ井にわざのむある人の花摘れ　逸淵

筆とつての出た坂の這入戸口かな　イセ 桐一

何ら哉袖に坂の雪垣縁かな　エト 杜有

秋きくのゝ城ちら川まで静か寄　ムサヽ 市月

川瀬をかけま坂に引出し哉れ　南ゝ

蛯折て一抱とるゝまた老にけり　仝

川照つて谷田ある雲に居さりけり　京 杜夢

雲遊ゝ山しのやまねる雨萩かな　ムサヽ 雨萩

舟にさ節裁とれ落ぬかゝつみり　イヨ 鶯居

枝のまゝ深く抱てのけ毛むしかな　スルカ 遠山

蹈つけて水に足ある鹿子かな　京池

衣食

更衣動よりて雨の晴間けり　（エト）遅流

袷きてせはしなかりし立居かな　由誓

注連張て内は無言の菜撰かな　（ムサシ）隣山

飼猿は布とく智恵有粽の郷　護物

内にけふ結ぶ粽はちまきかな　（イヨ）紫人

奥能百人ころしよ動てゆき也まれ也　耕雲女

慈

能済て一夜あかさん妹のもと　西馬

遠慮して出かねけり涼しさ　（ハリマ）耕雲

雉子も縫国の時なりに鳴し花　（ムサシ）竹山

神籟

灌仏の日まで涼しき捨来の花　茂子

かはすめはなきつくし若葉　由誓

日光山中

花揺の瀧はちその花をしへけり、　葛山

人となりの水撒まくや夜涼し　（エト）穆水

大雨にあらて寒暁の清積れ　（上ツケ）逸芙

以下秋季

名月よ書も雪みて寒さかれ　（シナノ）莪人

撫子の人下いやし武蔵野芦の花　（ミカハ）波之宮

雷社陣の松より月　因果経　逸瀾